

令和 6 年 6 月 19 日現在

機関番号：34416

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00691

研究課題名(和文)いわゆる「手段」タイプway構文に対するforce dynamic分析の可能性

研究課題名(英文)A force-dynamic analysis of the putative 'means' type of _way_ constructions

研究代表者

岩田 彩志 (Iwata, Seizi)

関西大学・文学部・教授

研究者番号：50232682

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：プロトタイプ的なway構文には、3つのタイプがあることが分かった。まずfight/push/force one's wayは、force dynamic分析がきれいにあてはまる。主語はAgonistとして、行く手を遮る障害物にforceを及ぼして、その物体を取り除く。次にpick/find/feel one's wayでは、力づくで障害物を取り除いているわけではない。しかし困難さを克服して進む、という点ではやはり「可能化」を表している。最後にwork one's wayでは、経路上には何ら困難をもたらすものがなく、「可能化」と言えない。「使役」タイプということになる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

英語におけるway構文(He fought his way through the crowd)は、非常に特異な現象である。これまではGoldberg (1995)の分析で、この現象の本質はあらかじめ解明されたとする風潮が強かった。しかし本研究により、way構文にはまだまだ解明されていない特性があることが明らかとなった。この現象は英語学の世界を離れてはあまり知られていないのだが、今後way構文の本質がさらに明らかになれば、広く、英語学習者全般に対しても、英文法の面白さを実感できる適例となるであろう。

研究成果の概要(英文)：Prototypical instances of way expression turn out to fall into three types from the viewpoint of force dynamics. First, _fight/push/force one's way_ can be straightforwardly accounted for by means of a force-dynamic analysis in the sense of Talmy (2000): The subject referent, as an Agonist, exerts force on to an obstacle in the way, as an Antagonist, and removes it, thereby enabling the motion. Next, _pick/find/feel one's way_ are not amenable to the same treatment. Nevertheless, the verbs do describe how the difficulty is to be dealt with. So they are still instances of 'enabling' type. Third, _work one's way_ does not involve removing obstacles in the way and is therefore not an instance of 'enabling' type. Instead, it is an instance of 'causative' type.

研究分野：人文学

キーワード：way構文 項構造 構文文法 語彙・構文アプローチ force dynamics

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

これまでの十数年間、研究代表者は結果構文と way 構文という二つの現象を主な研究対象として、語彙意味論研究を行ってきた。その結果、一方の way 構文については、way 構文のいわゆる「手段 (means)」タイプについてこれまでの通説と異なる見解にたどり着いている。もう一方の結果構文については、force に基づく分析 (Talmy 2000, Croft 2012) により、様々な結果構文の特性が説明できる理論を構築するに至った。そして force dynamics が頂構造現象の分析に非常に有効であることを確信するようになった。

ここで、いわゆる「手段」タイプの way 構文に force dynamic 分析を応用することが可能であり、さらにそうすることによりこれまでの研究成果を統合していく見通しが出てきた。そこで今度は、way 構文に対する force dynamic 分析がどこまで有効であるか、また force dynamic 分析を用いることによって、way 構文の特性がどこまで説明できるか、を実証的に探っていくことにした。

2. 研究の目的

本研究が目指すところは、force dynamics 分析がいわゆる「手段」タイプの way 構文に対してどこまで有効であるかを検証し、さらにそれを基にして way 構文の本質を解明することにつながることである。Talmy の force dynamics 理論を way 構文の分析に応用した研究は、これまで皆無であった。しかし way 構文が「外的な困難にもかかわらず進む」ことを表す (Goldberg 1995) という観察からすれば、way 構文が force dynamics 分析に馴染むことは自明の理である。

ただし、全ての way 構文が、そのまま force dynamics 分析で扱えるかどうかは、事実に基づいて検証する必要がある。そこで3つのコーパス (British National Corpus、Wordbanks Corpus、Corpus of Contemporary American English) を用いて、明らかに典型的な way 構文を選び出す。これらの動詞に基づく way 構文に対して force dynamics 分析が妥当かどうかを、実証的に検証することが、目的である。

3. 研究の方法

British National Corpus を用いて、頻度の高い上位 10 の動詞を選び出し、これらの動詞を主たる分析対象とした。これらのほとんどが、これまでの先行研究では「手段」タイプとされてきたものである。これらの動詞を伴う way 構文の実例を、特に「困難さを伴うかどうか」を基に調べた。困難さがある場合は、動詞の表す意味が、その困難さとどのような関係にあるかを、特に force dynamics の観点から丹念に調べた。一見困難さがないように見える場合でも、困難さとその関連を探り、やはり force dynamics の観点からどのように位置づけられるか、を探った。

4. 研究成果

BNC で way 構文の例を検索して、この構文に生じる例をほぼ網羅的に集めた。頻度が高い上位 10 の動詞は以下の通りである。make (1671 例) find (962 例) work (427 例) force (202 例) push (183 例) pick (173 例) fight (148 例) feel (117 例) pay (92 例) wind (88 例)。まず force・push・fight は、いずれも He fought/pushed/forced his way through the crowd のような文に生じて、「(群衆等を) 押しのけながら進む」という意味を表し、先行研究における「外的困難にもかかわらず移動する」(Goldberg 1995) といういわゆる「手段」タイプの特徴付けともピタリと合う。そしてこれらの way 構文の例には Talmy (2000) の force dynamic 理論を用いた分析が、うまく当てはまる。移動者が Agonist、群衆が Antagonist と考えられ、「移動者が群衆を押しよせながら進む」ことは、Agonist が force により Antagonist を取り除いて、進行を可能にしながら進んでいることに他ならない。

そしてこの force dynamic 分析は、force が物理的でなくてもあてはまる。やはり上位に入っ

ている pay は、He paid his way through college のような way 表現に生じるのだが、お金を払うことが、大学生活を送る上での障害 (= 経済的なもの) を取り除いている、と分析できる。

次に、find・pick・feel では force により障害物を取り除いているという分析が難しい。だがこれらの way 構文も、やはり「外的困難にもかかわらず移動する」という特徴付けに合うと考えることができる。まず pick one's way は、As LeRoi picked his way through the debris and destruction of the demolished town のように、自分の足を置く場所を選びながら進む、という移動を表している。つまり、障害物を避けることで、進むことを可能にしている。次に find one's way では、Ari tried to find their way through the labyrinth of Roirbak's complex to the canteen のように、自分の進むべき方向が分からず、道を探しながら進んでいる。「道が分からない」とは、外的困難の一種と考えることができるから、進むべき道を見つけることは、その困難を乗り越える行為になる。さらに feel one's way では、One night all the lights went off so we had to feel our way up to our rooms のように、暗くて先が見えない中を、手探りで進むことを表している。「前が見えない」とはやはり外的困難の一種であり、手探りをするのはその困難を乗り越えるための行為である。つまり find・pick・feel の way 構文でも、やはり困難を乗り越えて前進する、という意味では fight・push・force の way 構文と全く同じである。そのため結局は「可能化」タイプと認めることができる。

しかしどうしても「可能化」タイプと認めがたいのが work one's way である。「可能化」タイプでは、進行を妨げる障害物があり、それを何らかの手段で取り除き、進行を「可能化」していたわけだが、I was working my way up the ladder のような文では、そのような障害物が見当たらない。ただし上方向へ移動する際には、重力のせいで移動が困難になる。だから強いて言えば、重力もしくは移動者自体の重量が障害物に当たるが、それを取り除くわけにはいかない。代わりに、自らの身体に force を行使することにより、重力に逆らった移動を可能にしている、と考えることが出来る。この考え方に従えば、work one's way は force dynamics の観点から「可能化」タイプでなく「使役」タイプだということになる。

以上の考察から、BNC で頻度が高かった上位 10 の動詞には、「可能化」タイプであり force dynamics が適用できるもの、「可能化」タイプであるが force dynamics をそのままでは適用できないもの、「可能化」タイプでなく「使役」タイプと分析すべきもの、の 3 つがあることが分かった。このように、force dynamics 分析を適用することにより、これまで気づかれてこなかった way 構文の幾つもの特性を明らかにすることができた。

現在、way 構文について Jackendoff (1990) と Goldberg (1995) の分析が広く受け入れられており、この両者の分析を半ば前提としての研究が大半である。しかし本研究で明らかになったことは、いずれもこれまでの定説を覆すことにつながり、活発な議論を呼ぶことが期待される。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Iwata, Seizi	4. 巻 13
2. 論文標題 Another look at the interaction between verbs and constructions: The case of resultatives based on wipe	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Constructions and Frames	6. 最初と最後の頁 268-308
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1075/cf.21006.iwa	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Iwata Seizi
2. 発表標題 A force-dynamic account of _way_ expressions
3. 学会等名 English Linguistics Society of Korea Spring Conference 2023（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 岩田彩志
2. 発表標題 Way表現とforce dynamics
3. 学会等名 日本認知言語学会第24回全国大会（招待講演）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Iwata, Seizi	4. 発行年 2020年
2. 出版社 John Benjamins	5. 総ページ数 549
3. 書名 English Resultatives: A Force-Recipient Account	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------